

1、研究主題

「読みの力を育てる国語科指導法の研究」

～ 「表現活動」を通して～

2、主題設定の理由

「知識基盤社会」の時代だと言われる21世紀においては確かな学力、豊かな心、健やかな体の調和を重視する「生きる力」をはぐくむことがますます重要になっている。

この「生きる力」の中で大きな役割を担う「確かな学力」は、学校週5日制や総合的な学習の時間の導入による授業時数の削減や指導内容の変更等から、学力低下が懸念されており、現在の学校現場の中でも強く意識されている。この「生きる力」とは、自ら学び自ら考える力と身につけた知識を自己の生き方に反映させる能力であり、「確かな学力」はその基礎基本にあたるといってよい。

特に国語科における「読む・書く・聞く・話す」といった基本的な活動は、生きていくうえで必要不可欠な能力であり、国際化が進む社会においては、主体的・創造的に生きるためにも、自己の考えを的確に表現し、コミュニケーションを広げていくことが大切だと考える。このことは、新学習指導要領の国語科の改訂の趣旨である「言葉を通して的確に理解し、論理的に思考し表現する能力、互いの立場や考えを尊重して言葉で伝え合う能力を育成することや、我が国の言語文化に触れて感性や情緒をはぐくむことを重視する」に相通じるところだと考える。

本校では平成20年度の教研式標準学力検査CRTの結果が「話す・聞く」、「書く」領域において全国平均を下回っていたことから、「書くこと」「話すこと」の表現活動を取り入れ、文章を確かに豊かに読みとっていき技能を身につけさせなければならないと考えた。また児童の読書量は増えてはいるが、読み取ったことを表現する力はまだ不十分であり、物語文や説明文の読解において、自分の思いや考えを書いたり、話したりすることを高めさせる必要性を感じた。これらのことから研究主題を「読みの力を育てる国語科指導法の研究」とし、仮説検証を行ってきた。具体的には、読む活動のなかに、「書く活動」や「話し合う活動」を取り入れることにより、友達の発表と自分の考えを比べたり、重ねたり、発展させたりしながら、豊かに読み取っていく授業を行ってきた。また、指導法についても、試行錯誤、工夫・改善しながら授業実践を重ねてきた。その結果、少しずつ児童の読みの力が高まってきているという成果が得られた。

以上のことから本年度も昨年度の研究を継続し、児童の読む力をよりいっそう高めるために本主題を設定した。

3、研究の目標

国語科「読むこと」の力をつけるための「書く活動」「話し合い活動」を取り入れた効果的な学習指導の在り方を探るとともに、その学習を支える基礎的基本的な指導内容を究明する。

4、研究の内容

- (1) 国語科「読むこと」領域の力を付ける効果的な表現活動（「書く活動」・「話し合い活動」）を位置付けた学習指導法の工夫と実践
- (2) 「有田っ子スタイル」を定着させる指導法の共有化
- (3) 「書き慣れ」「話し合える」ための場の工夫と基本的なスキルの解明と整理

5、研究の方法

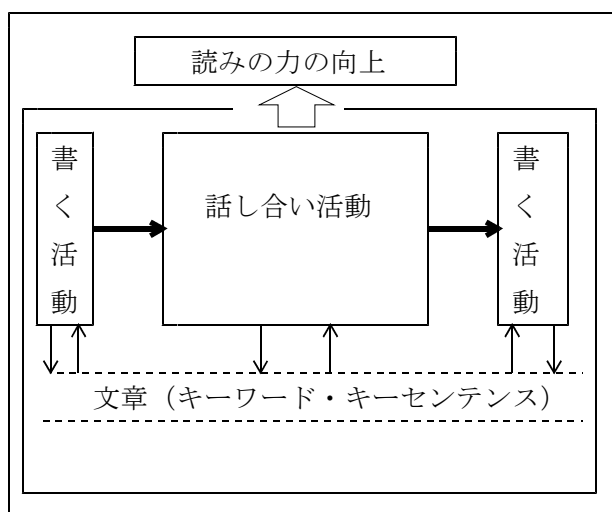
- (1) 国・県の学習状況調査、標準学力調査（CRT）市販テストにおける児童の学力・実態の分析
- (2) 「読むこと」領域の指導に関わる教材の分析とその共有化
- (3) 検証授業及び事前の指導案検討・模擬授業、事後の授業分析
- (4) 講師招聘、先行文献等による理論研究
- (5) 言語環境の整備及び表現活動の基礎力を付ける日常活動や読書活動の充実

6、研究の仮説

- 国語科「読むこと」領域の学習において、目標達成に適したキーワードやキーセンテンスを絞った上で、「書く活動」や「話し合い活動」を取り入れ、考えや思いを書かせ交流させていけば、児童の文章を観る目は育ち、確かで豊かな自分の読みがもてるようになるであろう。

7、授業づくりについて

本校が言う「表現活動」とは「書く活動」と「話し合い活動」であり、この2つの活動を連携させた授業展開を工夫することで、児童の読みの力は、確実に向上すると考える。ただし「書く活動」「話し合い活動」のどちらにおいても、常に書かれてある文章の叙述をもとに表現させていくことが大切である。また、表現活動そのものは、読むための手段であるから、日常的に様々な教科等や朝の時間等の取り入れ、読むことに効果的に機能するように高めておくことは欠かせない。



(1) 「書く活動」

書く活動は、児童一人ひとりにしっかりと思考する場を確保し、自分の考え（読み）をもたせために設定する。書かせることで児童は思考の射程を伸ばし、教師はそれを評価し個に応じた指導へとつなげていくことができる。

何をどのように書かせるのか、その内容と方法は、本時の指導目標と照らすとともに、今までの児童の読みの実態等を分析や教材のもつ特色を踏まえる必要がある。教師の確かな教材分析によって、キーワードやキーセンテンスを絞り込み、それをもとに自分の読みをもたせる。児童の書きたいという意欲や切実感によって、書くことが主体的な読みをつくっていくことになる。

「書く活動」の位置付けとして、基本的に次の2点が考えられる。

① 調べる段階

個々の読みの姿が、書くことを通して早い段階で教師はチェックでき、次の「話し合い」で児童の読みを生かしながら深めていくことができる。

② 深める段階

本時の学習範囲を読み深めた後に書かせるので、十分内容を理解できている評価ができる。また、今までの読みを整理したり、さらに豊かにしたりするのに効果的である。

何をねらって、そのキーワード（キーセンテンス）を読み深めるのか、どういう「読み」をさせたいから、ここに「書く活動」を取り入れるのか。物語文・説明文教材で学習すべき内容を踏まえて「書く活動」の目的・内容・方法を決めていかねばならない。

よって、本校では、15の「書く活動」を1年から6年に配列した「学習要語」をもとに取り入れていく。

読みのプロセス	「書く活動」	表現活動例	「学習要語」例	
			物語文	説明文
情報を取り出す	①意味を書く ②書き写す（視写） ③書き抜く（線を引く） ④図や絵にする ⑤表やグラフにする ⑥クイズをつくる	心情曲線 年表 人物関係図 図鑑	キーワード キーセンテンス 場面 人物 対比	キーワード キーセンテンス 構成 接続語 順序 段落 問いと答え
解釈する	⑦音読記号を付ける（音読劇） ⑧吹き出しを書く ⑨書き足して書く ⑩書き替える（リライト）	自注 吹き出し 脚本 俳句 変身作文	会話文・地の文 心情 行動 表情 性格 情景 人称 呼称	
	⑪まとめて書く（見だしをつける。要点や要旨を書く等） ⑫感想を書く ⑬紹介文を書く	手紙 ブックトーク 本の帯	主題 あらすじ 作者の意図	要旨 要点 要約
熟考・評価する	⑭評文を書く ⑮意見を書く	ガイド パンフレット 新聞	最後の一文	

「情報の取り出し」

教材の中に書かれてある事実をそのまま切り取って言葉にしたり・図式化したりすること。

「解釈」

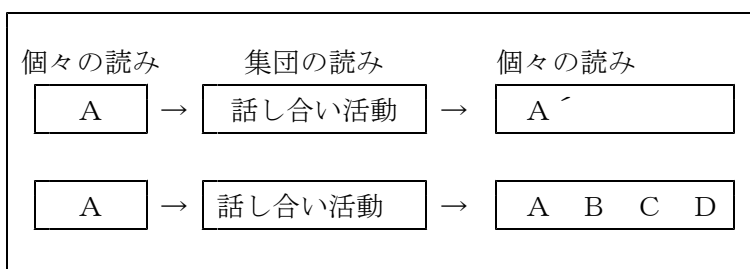
書かれてある情報（表現内容／表現形式）をもとに他のことについても考えたり、比較しながら書かれてある意味を理解したりすること

「熟考・評価」

書かれてある情報（表現内容／表現形式）について、自分の知識や経験から批判したり、称賛、仮定したりすること

(2) 話し合い活動

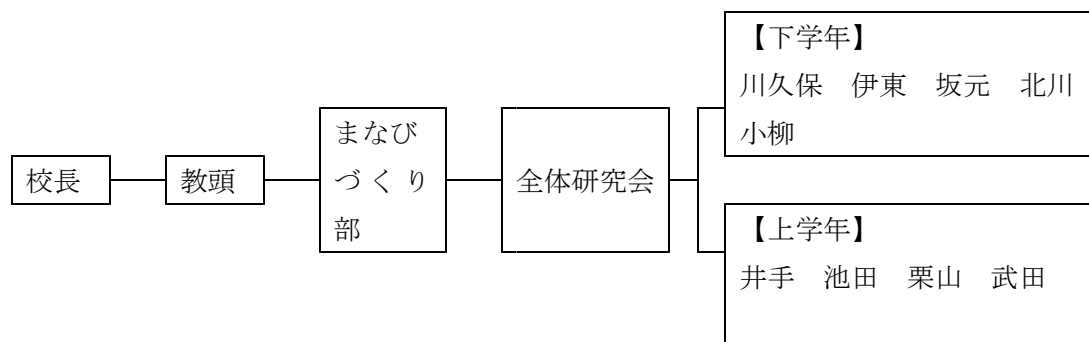
「話し合い活動」は、個々の読みを集団の読みによって深め・広げるために交流しあう活動である。話し合う前はAという考えだったのがA'へと変わる。あるいは、友だちの発表によってBやCやDもあることに気付く。それぞれの児童が「話し合い」によって自分の読みが向上できたことが自覚できるように仕組んでいきたい。話し合い活動とは、一問一答ではなく、教師の一発問から子どもたち同士で言葉でパスをつなぎ、生き生きとした躍動感のある一問多答の授業であり、単なる「発表しあい」にならない互いの考えを継続的に聴き合っている授業である。



本校における「話し合う」子の具体像

- (1) 耳で 目で 心で「聴く」子
- (2) 自分の考えを比べながら聴く子
- (3) 前の発言とつなげて話す子
(～といいましたが) (話をかえていいですか)
- (4) 書かれてある文章表現を根拠にあげて話す子
(～と書いてあるところから・・・) (私～と思います。そのわけは・・・)

8、研究組織



9、研究を進めるにあたって

- (1) 本校の研究は仮説検証型であるから、私たちは常に児童の側に立って、または立ち戻りながら児童の身・実になる研究をしていかなければならない。そのためにも、児童の取り組みや変容が見える研究でありたい。1時間の授業そして1単元の中で、評価にもかかわるが、どう高める（変容させる）か、さらに1学期あるいは1年を通してどう高めるかを常に意識した学習活動を行い、その成果と課題をしっかりと把握し次年度の研究へとつなげていかなければならない。

研究の成果はすぐに表れるのではないが、日々の授業の中で積み重ねてきたことが、3年目の研究であるから、目に“見える”財産（と課題）を見つけていきたい。

「見える」・・・ 児童の側から～国語科を通しての学力向上と心の育ち
教師の側から～有効な指導・手立ての発見や指導力の向上

- (2) そのためにも、本研究は国語科の授業だけで終わってはならない。全教科、日常活動を通して、児童の言語能力と意欲を高めていく必要がある。

「書く活動」と「話し合い活動」を通して読みの力を育てるためには書く活動と話し合い活動を支える素地を身につけさせていく必要がある。有田っ子スタイルの定着を図り、視写や言語事項の指導、音読や読書、あるいはノート指導、日記、スピーチなど基礎的基本的な内容日々の学習の中で継続して指導していかなければならない。このことと国語科の指導が研究を支える“両輪”となっていかなければならないだろう。

- (3) 「書く活動」「話し合い活動」はあらゆる場面に取り入れ、それ単独で鍛えていくこともあるが、研究授業としては、1単位時間の中に、この2つを関連させた指導が見えるような授業展開を構想する。以下の授業形態が考えられる。

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none">① 書く→話し合う② 話し合う→書く③ 書く→話し合う→書き改める。④ 前時に書いたことをもとに話し合う |
|---|